

論文

母性看護学実習における教育方法に関する文献の検討

梅崎 みどり¹⁾, 富岡 美佳¹⁾, 井上 理絵¹⁾

キーワード：母性看護学実習，教育方法，文献研究

要旨：本研究の目的は，我が国の母性看護学実習に関する文献を概観し，母性看護学実習における教育方法の現状と課題を明らかにすることである。医学中央雑誌 Web 版を用い，キーワードを「母性看護学実習」として検索した。対象出版物は 2008 年から 2013 年までに国内で発表された原著論文とした。その結果，119 編を抽出した。そして，年次別，内容別に分類し，教育方法・内容・効果について検討を行った。その結果，論文数は 2009 年次から増加し始め，2009 年が多かった。上記論文を分析した結果，[母性看護学実習での学び]，[母性看護学実習における教育方法の検討]，[母性看護学実習に関する意識調査]，[母性看護技術経験の状況]，[実習事前課題の検討]，[男子看護学生の学生生活上の困難]，[看護実践の受け入れと対応]の順に多い結果となった。このうち [母性看護学実習における教育方法の検討]について更に内容を検討してみると，《授業と実践の統合》，《実習指導過程における環境の調整》，《効果的な教育内容の検討》，その他に分類できた。今後，少子化などの影響により母性看護学領域の実習施設は更に不足することが予測されていることから，限られた実習環境のなかで対象理解につながる教育方法の検討が急務であることが示唆された。

I. はじめに

近年，わが国では医療の高度化や看護ニーズの多様化に伴い，看護職員への期待が高まっている。1992年の「看護師などの人材確保の促進に関する法律」の施行などを契機として看護系大学は急激に増加し，2013年には全国で218の看護系大学が開設されている¹⁾。岡山²⁾は，こうした背景を少子高齢化，医学・医療の高度化，人々の価値観の変化等，社会の多様な変化により，高度な専門性を備えた看護職が社会から求められているとしており，「大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」最終報告³⁾では，学士課程における看護系人材養成には，指定規則による特定の職種に関する専門的な知識・技術の教育に留まらず，批判的思考力や創造性の涵養，研究能力の育成が求められると示されている。その一方で，少子，高齢化社会の到来や医療の高度化，実習における侵襲を伴う看護行為の制約等，社会や保健医療を取り巻く環境の変化と学生の多様化に伴って，臨地実習の在り方の見直しや教育内容の工夫の必要性等の課題が指摘されている³⁾。

母性看護学実習は，妊娠・分娩・産褥各期にある女性と新生児及びその家族を対象とし

1) 山陽学園大学看護学部看護学科

て、その家族の役割移行を理解し、健康の保持・増進と家族機能の順調な発達に関する援助について学習する。しかしながら、神林ら⁴⁾は、学生にとって母性看護学実習は、難易度が高く緊張や不安の強い実習であることを報告している。そして、少子化などの影響により母性看護学実習施設は今後更に不足することが予測されており、限られた実習環境において対象理解につながる効果的な教育方法の検討は急務であるといえよう。

そこで本研究では、わが国の母性看護学実習に関する文献を概観し、母性看護学実習における教育方法の現状と課題を明らかにすることを目的とした。

II. 研究方法

1. 研究デザイン

文献研究

2. 研究方法

文献検索は「母性看護学実習」をキーワードとして実施した。検索データベースは医学中央雑誌 Web 版を用い、対象出版物は 2008 年から 2013 年までに国内で発表された原著論文とした。上記検索の結果抽出された 119 文献を年次別、内容別に分類し、教育方法の内容やその効果について検討を行った。

3. 倫理的配慮

著作権の侵害にならぬよう、引用・参考文献名および引用・参考箇所を明確に示す。

III. 結果

1. 年次別発表論文数の検討（表 1）

年次別に発表された論文数は表 1 に示す通りであり、2009 年から増加し始め、2009 年が 28 編で最も多かった。

表1. 母性看護学実習に関する発表論文数

発表（年）	論文数（編）
2008	13
2009	28
2010	27
2011	21
2012	21
2013	9
合計	119

2. 母性看護学実習に関する論文の内容の検討

1) 論文の内容

2008 年から 2013 年までの母性看護学実習をキーワードとする原著論文は 119 編であり研究内容を内容の類似性により分析した結果、[母性看護学実習での学び] 34 編、[母性看護学実習における教育方法の検討] 22 編、[母性看護学実習に対する意識調査] 18 編、[母性看護技術経験の状況] 10 編、[実習事前課題の検討] 8 編、[男子看護学生の学生生活上

の困難] 5編, [看護実践の受け入れと対応] 3編の順に多い結果となった(表2)。

表2. 母性看護学実習に関する論文の内容

内容	論文数(編)
母性看護学実習での学び	34
母性看護学実習における教育方法の検討	22
母性看護学実習に関する意識調査	18
母性看護技術経験の状況	10
実習事前課題の検討	8
男子看護学生の学生生活上の困難	5
看護実践の受け入れと対応	3
その他	19
合計	119

上記論文のうち, [母性看護学実習における教育方法の検討] 22編について, さらに内容を検討した結果, 《授業と実践の統合》8編, 《実習指導過程における環境の調整》6編, 《効果的な教育内容の検討》5編, その他3編に分類できた(表3)。

表3. 「母性看護学実習における教育方法の検討」に関する22論文の内容

内容	論文数(編)
授業と実践の統合	8
実習指導過程における環境の調整	6
効果的な教育内容の検討	5
その他	3
合計	22

2) [母性看護学実習における教育方法の検討] に関する研究対象

研究対象は, 学生20編(91.0%), 臨床指導者2編(9.0%)であった。そして, 学生の所属する教育機関別にみると, 看護系大学学生10編(50.0%), 3年課程看護専門学校学生6編(30.0%), 3年課程看護短期大学学生4編(20.0%)であった。

3. [母性看護学実習における教育方法の検討に関する] 論文の内容

1) 授業と実践の統合

授業と実践の統合に関する論文では, 小林⁵⁾は, 母性看護学領域における教授方法に関する研究で, 母性看護学実習前の授業において看護場面を想定したロールプレイの実施や保健指導案の作成は, 母性看護学実習での看護展開に有効であることを報告しており, 露木ら⁶⁾は, 母性看護学のカリキュラム評価に関する研究で, 授業と授業の間に演習を組み入れることや, 母性看護学実習前に再度技術確認を行うことは, 実習での「沐浴」「子宮底測定」「レオポルド触診法」「児心音聴取」などの実施に有効であり, 講義内容の概念的な認識を体験することで理解が深まることを示している。

2) 実習指導過程における環境の調整

実習指導過程における環境の調整に関する論文では, 川上ら⁷⁾は, 母性看護学実習における指導者の役割に関する研究で, 男子看護学生の母性看護技術経験の拡大には受け持ち

患者の選定が重要であることを示している。主濱ら⁸⁾は、母性看護学実習を指導する助産師を対象に行った研究で、指導者は、学生がハイリスクな状況に遭遇しないように実習目標に合わせた患者の選定や、学生の心理的動揺に配慮していることなどを報告している。また、平山ら⁹⁾は、ペア実習と実習満足度に関する研究で、実習での学習効果に実習グループの関係が影響を及ぼすことや、実習指導者との良好な関わりが重要であることを報告している。さらに、柴田ら¹⁰⁾も、母性看護学実習における知識獲得に影響する因子に関する研究で、実習後の知識獲得には「病棟スタッフの関わり」が影響しており、実習指導者と連携した指導体制が充実することで知識の深化につながると述べている。

3) 効果的な教育内容の検討

効果的な教育内容の検討に関する論文では、小山¹¹⁾は、分娩時の看護体験と類似体験による学びの比較に関する研究で、母性看護学実習において分娩時の看護体験が行えた学生に比べ、類似体験を行った学生の学びには「不安への緩和」「胎児に関する異常の早期発見」「チーム間の重要性」「母親と児の絆」「生命に対する畏敬」「自己の存在価値の見直し」が不足することを報告している。また、末永ら¹²⁾は、新生児モデルを使用した育児疑似体験の効果に関する研究で、母性看護学実習前に新生児モデルによる育児疑似体験を行うことで、児に対する肯定的な感情が高まりやすく、育児疑似体験は母性看護学実習の準備学習について効果的であることを示している。そして、島田ら¹³⁾は、母性看護学実習前の補助的な学習として用いた e-learning システムに関する研究で、構築した e-learning システムは、学生への提供が可能なツールの一つであることを報告している。

4) その他

《授業と実践の統合》、《実習指導過程における環境の調整》、《効果的な教育内容の検討》以外の論文では、佐藤ら¹⁴⁾は、母性看護学実習過程の質を高めるには、「学習内容・方法」「学生-患者関係」「教員、看護師-学生相互行為」「学生への期待・要求」「カンファレンスと時間調整」「学生-人的環境関係」の教授活動の改善が必要であることを報告している。また、山口¹⁵⁾は、母性看護学に関する苦手意識の形成に関する研究で、学生の母性看護学に関する苦手意識は、講義を受ける中で形成されることが多く、「覚えることが多い」「覚えにくい」「イメージが付きにくい」という認知に関する要因が影響することを示している。

IV. 考察

今回、「母性看護学実習」に関する文献検索を行い抽出された 119 文献を分析対象とした。2009 年以降母性看護学実習に関する論文数が増加した背景には、2008 年の「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」¹⁶⁾により、看護職員に求められる資質・能力が検討され、看護教育の充実に向けて大学教育への移行が示されたことや、2009 年の「大学における人材養成の在り方に関する検討会一次報告」³⁾により、看護教員の養成のあり方や継続教育等、看護教員の資質や能力の維持・向上に向けた課題や改善の方向性が示されたことにより、看護基礎教育が注目され、関心が高まったことなどが考えられる。

母性看護学実習における教育方法の検討に関する研究対象は、学生が約 9 割であり、教員や患者を対象にしたものはなく、これについては安齋ら¹⁷⁾と同様の傾向であった。杉森ら¹⁸⁾は、看護学実習は学生・指導者・クライアントの 3 者を中心に、それぞれにその

他の医療従事者、家族、他の学生が複雑に関係しあうことを必然とする授業であり、教員や指導者を対象にした研究や三者の相互行為に関する研究の必要性を述べている。本研究の結果からも同様の取り組みが必要と考えられた。

次に、研究対象の学生が所属する教育機関は看護系大学が最も多かった。これは、看護系大学の急増に伴い、学士課程における看護学基礎カリキュラムの構築や大学新設による実習施設の開拓、看護系大学教員の教育力などには課題がある^{3) 19)}ことが影響していると考えられる。

母性看護学実習における教育方法の検討に関する研究内容について論文を概観してみると、母性看護学実習における教育方法の検討については、授業と実践の統合や実習指導過程における環境調整の重要性について多く報告されていた。

《授業と実践の統合》では、実習による学習効果の向上には、学生が妊娠中の妊婦の生活や育児をイメージできることが重要であり、授業と授業の間に演習を組み入れるなどして講義内容の概念的な認識を体験する必要性について報告されていた^{5) 6)}。また、母性看護学実習前の補助的な学習方法のひとつとして e-learning システムが示されていた¹³⁾。齋藤²⁰⁾は、母性看護学の教育方法の検討に関する研究で、マルチメディア教材の工夫は、対象の理解と愛着を高めることに効果があり、教材の中でも学生が最も対象理解が深められるのは、模型・人形であることを報告している。核家族化が進み、妊婦や新生児・乳児との接触体験が少ない学生が、妊娠や出産、育児に伴う身体的、精神的、社会的な変化を具体的にイメージすることは困難であることが予測され、模型・人形を用いたロールプレイや妊婦の生活を想定した妊婦体験演習を行うなど、講義により得た知識と適切な教材による演習を組み合わせることで、母性看護学実習における対象理解の深化が期待できる。また、実習事前学習や学内実習においても新生児モデルによる育児疑似体験は母性看護学実習の準備学習として効果的であることが示されていた¹²⁾。前述したように、模型や人形を用いた演習により母性看護学実習の準備性が高められることは明らかであり²⁰⁾、教科書的知識と実践的知識の統合を図るための教材の開発や、教材の活用を含めた授業設計が重要であるといえよう。

《実習指導過程における環境の調整》では、男子学生の看護技術経験の拡大には受け持ち対象者の選定が重要であることや、学習効果に実習グループの関係性が影響を及ぼすこと、また、学習効果を上げるための知識獲得には実習指導者との関わりが重要であることが示されていた^{7) 8)}。豊田ら²¹⁾は、男子学生の母性看護学実習実施については、対象に承諾を得ることや男子学生を単独で行動させないなどプライバシーを守ることでの臨床側への配慮と、看護学生としての意識や態度を高めるような働きかけを行うという男子学生への配慮が必要であると述べている。また、健やか親子 21 最終報告²²⁾では、家族の小規模化、近隣における人間関係の希薄化などにより、父親が積極的に育児参加するケースは増加しており、今後育児疲れや育児不安に陥る父親が増加する可能性を指摘している。したがって、男子学生が母性看護学実習を行ううえでの教育的配慮として、臨床側との連携を密にすることはいうまでもないが、男子学生には、学生自身が親になるための準備段階にあることや、女性のみならず、男性も出産や育児に関する知識や経験を積み、対象理解に努めることが重要性について伝える必要がある。

また、学習効果と実習グループの関係性について、水口²³⁾は、看護学実習は長期間にわたるため、グループの関係がメンバーの学習状況に及ぼす影響は大きく、看護学実習グループメンバーの構成要因は、心理・性格特性、成績(知的能力)などのメンバーの資質、グループの凝集性などに注目された編成であることを報告している。武井²⁴⁾は、グループを安定させるための教員の関わりは不可欠であると述べており、加藤²⁵⁾は、看護学生のストレス反応に関する研究で、看護学生の友人間で生じるストレス反応に対して、個人の対処能力を高めること、解決先送りコーピングの選択を促進することが重要であると述べている。したがって、看護学実習を担当する教員は、グループ間の人間関係が学習状況に大きく影響することを認識し、グループメンバーとの人間関係にストレスを感じている学生には、解決先送りコーピングを助言するなど円滑な人間関係が保てるように日常的に関わることが重要であると考え。そして、実習指導者との連携を密にすることで、学生の看護上のニーズに関するアセスメント能力は向上することが期待できる。

効果的な教育内容の検討では、分娩時の看護体験を実施した者と類似体験をした者では共通した学びと不足する学びがあることが報告されていた¹¹⁾。2013年の合計特殊出生率は1.43(厚生労働省2013年調べ)と低率であり、母性看護学実習において学生が分娩期の看護を実践することや生命誕生の瞬間を見学できる機会は少なくなることが予測される。しかしながら、井上²⁶⁾は、学生にとって分娩見学は学生の感性に触れる体験となり、学生の感性を伸ばす・自己成長を促す重要な意味を持つと述べている。分娩期の実習では、分娩時の看護体験の類似体験であっても、実施した者と共通する学びがあることが報告されており¹¹⁾、実習指導教員は可能な限り学生が分娩に立ち会えるように実習指導者との調整をはかることが必要である。また、母性看護学実習中の保健指導の実施は、母性看護学実習での看護展開に有効であることが報告されており⁵⁾、母性看護学援助論などの授業科目に保健指導演習を組み込むことが重要であるといえよう。

《授業と実践の統合》、《実習指導過程における環境の調整》、《効果的な教育内容の検討》以外の論文では、母性看護学実習に関する評価について、阿部²⁷⁾は、看護学実習評価において、看護学実習の特性を生かした教育評価の方法、教師、実習指導者に関する教育評価研究の必要性を示唆している。そして、杉森¹⁸⁾は、看護学実習の特質についてあらゆる看護の場において、各看護学の講義、演習により得た科学的知識、技術を実際のクライアントを対象に実践し、既習の理論、知識、技術を統合、深化、検証するとともに、看護の社会的価値を顕彰する授業であると述べており、看護学実習に関する教育評価の発展は母性看護学実習での学習効果の向上において重要であると考え。次に、苦手意識形成の要因については、母性看護学に関する苦手意識は、講義を受ける中で形成されることが多く、記憶に関する要因が影響することが報告されていた¹⁵⁾。本多²⁸⁾は、母性看護実習中に学生が感じるストレスについて「看護過程」「知識のなさ」などを示している。母性看護学実習では「褥婦」「悪露」をはじめとした他領域では用いることがない専門用語や、基準値に基づき対象の生理的な適応をアセスメントする能力が求められることから、学生には難易度が高いと受け取られやすく、苦手意識につながる考えられる。そのため、母性看護学援助論での看護過程演習の強化や基礎的知識定着に向けた教材の工夫、対象をイメージしやすい教育方法の検討が急務であると考え。

本研究の結果から、わが国の母性看護学実習における教育方法には課題があることが明らかとなった。今後、少子化などの影響により母性看護学実習施設は更に不足することが予測されており、実習を効果的に行うためには、机上の学習と実践をつなぐ学生自らの探究心の向上を支援する必要があると考えられる。そして、主体的に学ぶ学生、効果的な教育方法、実習環境の調整などの要因をあわせた更なる研究が必要である。そして、今回研究対象とした論文には母性看護学領域教員の看護実践場面における教授活動に関する研究はみられなかったため、今後は教員を対象とした研究も発展させるなど、限られた実習環境のなかで対象理解につながる教育方法の検討の必要性が示唆された。

本研究では、医学中央雑誌 Web 版に限定してデータを収集しているため、限界がある。今後、分析対象を増やし、得られた結果の信頼性を高めることで、効果的な母性看護学実習に関する教育方法の示唆が得られると考える。

【引用文献】

- 1) 厚生労働省「看護師等学校養成所入学状況及び卒業生就業状況調査」2013。
(<http://www.e-stat.go.jp/SG1/estat/List.do?lid=000001116838>)
- 2) 岡山寧子. 学士課程における看護系人材養成の在り方を考える～いかにして看護実践力を育てていくのか～. 京府医大誌. 2011, 120 (10), 761-768.
- 3) 文部科学省 「大学における大学における看護系人材養成の在り方に関する検討会」最終報告. 2011.
(http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/40/toushin/1302921.htm)
- 4) 神林玲子, 菅野美香, 西脇美晴. 母性看護学実習における学生の不安と自己受容性に関する研究. 山梨医科大学紀要. 2000, 17, 80-83.
- 5) 小林由香. 母性看護学領域における効果的な教授方法の一考察. 看護展望. 2012, 38 (1). 81-87.
- 6) 露木貴子, 久保貴巳子. 母性看護学におけるカリキュラムの評価 知識と技術の統合をめざして. 神奈川県立平塚看護専門学校紀要. 2013, 17, 23-27.
- 7) 川上品子, 金子直美, 森口祐子ら. 母性看護実習における指導者の役割 (第 2 報) 男子学生の看護技術経験の試み, 日本看護学会論文集: 母性看護. 2011, 41, 46-49.
- 8) 主濱治子, 刀根洋子, 鈴木祐子. 母性看護学実習において看護学生が予期せぬ状況を体験することに対する実習指導者の関わり, 日本ウーマンズヘルス学会誌. 2012, 11 (1), 57-65.
- 9) 平山綾蘭, 市川英加, 長田貴子ら. ペア実習の人間関係と実習満足度との関係. 日本看護学会論文集: 看護教育. 2012, 42, 46-48.
- 10) 柴田文子, 母性看護学実習において知識獲得に影響する因子. 横浜創英短期大学紀要. 2012, 8, 59-63.
- 11) 小山満子. 分娩時の看護体験と類似体験の比較による学びの検討. 旭川大学保健福祉学部紀要. 2010, 2, 49-54.
- 12) 末永芳子, 原田なをみ. 新生児モデルを使用した育児疑似体験の効果. 日本看護学論文集: 看護教育. 2009, 39, 385-387.

- 13) 島田智織, 細矢智子, 安川揚子他. 母性看護領域の e-learning システムの構築と評価 . 茨城県立医療大学紀要. 2010, 15, 7-13.
- 14) 佐藤美奈子, 寺田眞廣. 母性看護学実習過程の評価 授業過程評価スケール(看護実習用)を用いて. 三育学院大学紀要. 2010, 2(1), 19-33.
- 15) 山口静江. 母性看護学に対する苦手意識の形成要因と軽減要因. 日本看護学会論文集：母性看護. 2013, 43, 84-87.
- 16) 厚生労働省「看護基礎教育のあり方に関する懇談会」2008 .
(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/07/dl/s0731-8b.pdf>)
- 17) 安斎由貴子, 山田あゆみ, 大賀明子. 看護学実習に関する研究動向と今後の課題 1. 看護教育. 1994, 35 (13), 1122-1127.
- 18) 杉森みど里, 舟島なをみ. 看護教育学, 第4版, 医学書院. 東京. 2009.
- 19) 平良陽子, 大町弥生, 片岡三佳ら. 看護系大学教員を対象にした研究の動向. 藍野学院紀要. 2004, 18, 84-88.
- 20) 齋藤雅子. マルチメディア教材を活用した母性看護学における授業方法改善と母性準備性の変化に関する調査. 日本看護学会論文集：看護教育. 2012, 136-138.
- 21) 豊田裕美子, 岡永真由美. 男子学生の母性看護学実習指導に関する文献的考察. 神戸市看護大学紀要. 2001, 5, 73-79.
- 22) 厚生労働省「健やか親子21」最終評価報告書2014.
([http:// rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka /pdf/saisyuuhyouka.4.pdf](http://rhino.med.yamanashi.ac.jp/sukoyaka/pdf/saisyuuhyouka.4.pdf))
- 23) 水口陽子. 看護学実習グループの人間関係に関する文献研究. 新潟県立看護短期大学紀要. 2003, 9, 9-11.
- 24) 武井麻子. グループという方法, 医学書院, 東京. 2001.
- 25) 加藤司. 看護学生における対人ストレスコーピングがストレス反応に及ぼす影響. 東洋大学人間科学総合研究所紀要. 2007, 7, 265-275.
- 26) 井上沙織, 佐々木明香. 母性看護学実習での分娩見学体験の学び. 日本看護学会論文集：看護教育. 2014, 44, 122-125.
- 27) 阿部オリエ. 看護学実習における評価に関する文献検討. 日本赤十字九州国際看護大学 IRR. 2009, 7. 51-55.
- 28) 本多 洋子, 石沢 敦子. 母性看護学実習における看護学生のストレスの緩和をはかる教員の指導要因についての検討. 桐生短期大学紀要. 2007, 18. 117-123.